

タイムカプセルと松下館 —記録／記憶の一時的忘却メディア

馬 場 伸 彦

Time Capsule and Matsushita Pavilion
- temporary oblivion media for recording / memory

BABA Nobuhiko

Abstract : A full-fledged "time capsule" in Japan is the "Time Capsule EXPO '70" exhibited at the Matsushita pavilion of the Matsushita Electric Group of the 1970 Japan Exposition. This was planned jointly by the Mainichi Shimbun and Matsushita Electric Industrial. Time capsule produced by combining the technical capabilities of Matsushita Group continues to sleep deeply in the ground of Osaka Castle. The opening is set for the future after 5000 years, AD 6970. Although the time capsule is a recording / storage media, it is always in a state where it can not be accessed. In other words, it is also a device for temporarily "forgetting". But oblivion is not an eternal oblivion but a temporary one. Opening the time capsule is to make the memory / record resuscitate, its interpretation and meaning can be left to the people of the future. In this paper, we consider "time capsule EXPO '70" as "media" and semantically discuss its existence.

Key Words : Time capsule, memory, record, oblivion, Expo '70, Matsushita Pavilion

要約：日本における本格的な「タイムカプセル」は、1970年日本万国博覧会の松下電器グループのパビリオン「松下館」に展示された「タイムカプセル EXPO'70」である。これは毎日新聞と松下電器産業の共同で企画されたものである。松下グループの技術力を結集して製作されたタイムカプセルは、現在でも大阪城の地中深くに眠り続けている。開封は5000年後の未来、西暦6970年に設定されている。タイムカプセルは、記録／記憶の装置でありながら、常にアクセスできない状態にある。その意味でタイムカプセルは、一時的に「忘却」させるための装置であるかもしれない。タイムカプセルの開封とは記憶／記録を蘇生させることであり、その解釈や意味は未来の人々に委ねられる。本稿では、「タイムカプセル EXPO'70」を、「メディア」として見做し、その存在を意味論的に考察するものである。

キーワード：タイムカプセル、記憶、記録、忘却、EXPO'70、松下館

は じ め に

日本における本格的な「タイムカプセル (Time Capsule)」は、1970 年日本万国博覧会の松下電器グループのパビリオン「松下館」に展示された「タイムカプセル EXPO'70」である。

これは毎日新聞と松下電器産業の共同で企画されたもので、松下グループの技術力を結集し製作され、現在もなお大阪城を臨む天守閣広場の地中深くに眠り続けている。その開封は、1970 年から 5000 年後の未来である西暦 6970 年に設定されている。



大阪城天守閣広場の「タイムカプセル EXPO'70」のモニュメント

埋設された「タイムカプセル EXPO'70」には、同様のものが2基存在する。一基は、100 年ごとに取り出し、状態を確認してから、埋め戻す。もう一基は 5000 年間封印されたまま休眠する。

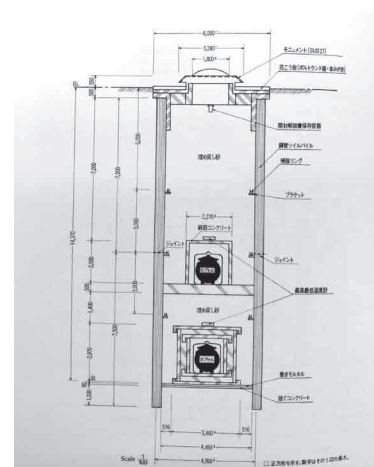
タイムカプセルの最終開封時期に関して計画立案当初では 1000 年案、3000 年案、5000 年案があったという。『記録書』によれば、「まず 1000 年案については、日本における奈良・東大寺正倉院の文化財が、1000 年以上経過しても、なお、よく保存されているという状況から、20 世紀の進んだ保存技術を活用すれば、もっと長期間残すことができるという理由で、取り下げられた。(中略) “文明の歴史は 1970 年を起点として、過去のほぼ 5000 年前にさかのぼることができる。そこで未来 5000 年後を設定すれば、現在は、その過去と未来を結ぶ時間の線上のちょうど中間地点に位置することとなり、有意義である” と考えたからである。」¹⁾と記されている。

タイムカプセルは、収納時における「現物資料」や「記録」を堅牢な容器に閉じ込め、(大抵の場合は) 地下に埋設して、歴史的時間ともでもいう長期間に及んで保存するものだ。『大辞林』によれば、「その時代の文化や生活の様子を伝えるために、メッセージとなる記録や品物を詰めて埋められる容器」と定義されている。したがって、先行研究においてタイムカプセルは、おもに文化財保護、文化資源学などの観点から論じられてきた。坂口英伸『モニュメントの 20 世紀タイムカプセルが伝える〈記録〉と〈記憶〉』(吉川弘文館、2015 年)、アメリカのタイムカプセル史を網羅した William Jarvis『Time Capsules: A Cultural History』(2002)などを挙げるができる。

未開封のまま 5000 年もの間埋設したままに放置するということは、人の一生を遙かに超えており、ほとんど「永遠」と同義である。だが、この想像される時の流れの長大さこそが、収蔵品の内容にも増して「タイムカプセル EXPO'70」をいっそう魅力なものにしている。

タイムカプセルは、かつての「現在」を表現する物質をそのまま容器に封入し、経年変化が起きない状態を人工的に作り出す装置、時の流れを凍結させる装置である。タイムカプセルの開封時における体験とは、凍結された「過去」が「現在」に現れることである。つまり、埋設され、ある一定の期間、見ることが出来なかった「収納物」が、開封を迎えることで、「過去」が、突如現れたかのような気持ちにさせられるのだ。比較的埋設期間が短い、卒業記念に埋められるようなタイムカプセルの場合でも、開封時において私たちは過ぎ去った過去に連れ戻されたかのような感覚を共有することになる。タイムカプセルの収納物は、失われた「時間」の代理でもあるのだ。

タイムカプセルは、記録／記憶の装置でありながら、常にアクセスができない状態にある。言い換えれば、それは、一時的に「忘却」させるための装置でもある。しかし、その忘却は永遠の忘却ではなく、あくまでも一時



埋設構造断面図 (『TIME CAPSULE EXPO'70 記録書 1970 年からの 5000 年後へのメッセージ』より)

¹⁾ 『TIME CAPSULE EXPO'70 記録書 1970 年からの 5000 年後へのメッセージ』タイム・カプセル EXPO'70 記録小委員会 毎日新聞社／松下電器産業株式会社編、1975.3、6 ページ

的なものである。埋設したタイムカプセルが消滅しないかぎり、たとえすべての人間がそれを忘れてしまっても、一時的な忘却でありつづける。タイムカプセルの開封とは記憶／記録を蘇生させることであり、その解釈や意味は未来の人々に委ねられるのである。

また、タイムカプセルを、「記録／記憶」のメディアとすれば、そこには、「出来事を保管すること」と「出来事を継続すること」という、二つの様態が区別されていなければならない。「出来事を保管する」ためには、堅牢なタイムカプセルの製造が不可欠であり、「出来事を継続する」ためには、あらかじめタイムカプセル製造後の道筋を想定し、明示しておかなければならない。あるいは、100年毎に開封され埋め戻されるタイムカプセルのように、出来事を再読する機会を設けることが求められるのだ。

あらゆる出来事は、記録／記憶され、保管される必要があるが、永遠と思われるような長期間に渡って保管するためには、一時的に忘却させ、蘇生させるという手順が重要となる。つまり過去を見出すための機会と期限をあらかじめ決めて準備しておくことが、一時的忘却の前提条件なのであり、完全な忘却は、存在しても存在しないことと同じになってしまう。

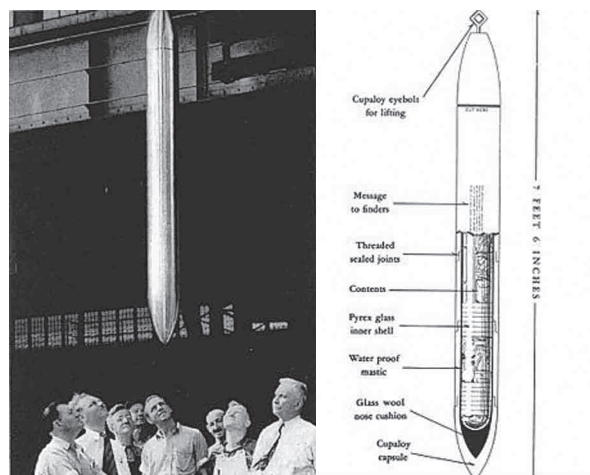
本稿では、日本万国博覧会における松下館に展示された「タイムカプセル EXPO'70」を、記録／記憶を継承する「装置＝メディア」として見做し、地中深く埋設されることによって不可視化された存在を意味論的に考察したいと思う。

1. タイムカプセルの誕生

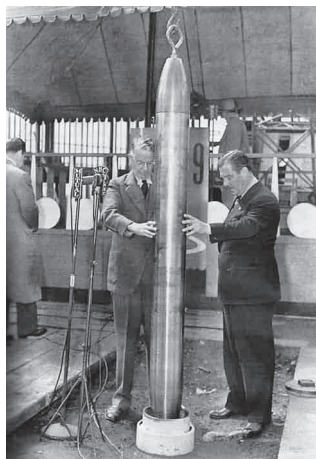
世界ではじめて、展示物としての「タイムカプセル」が計画されたのは「明日の世界の建設と平和」をテーマに開催された1939年のニューヨーク万国博覧会（New York World's fair 1939-1940）であった。製作にあたったのは、GEと並んでアメリカを代表する電機メーカーであるウェスティングハウス社（Westinghouse Electric Corporation）である。その内容は、現代文明の様々な成果や日常品を魚雷型の金属カプセルに詰め込み、地中深くに埋めて、遙か未来の5000年後まで保管し、未来人に現代文明解明の手がかりを届けようとするものであった。

「タイムカプセル」という着想は、当時相次いでいた考古学的発見が契機となったといわれている。とりわけ1922年ツタンカーメン王墓の発掘において、王のミイラと財宝が盗掘されずにほとんど手つかずのままに保存されていたことは世界中に大きな衝撃を与えた。人類は3000年以上の時を隔てた古代文明を目のあたりにし、埋蔵物を通じて凍結された「過去」に遭遇したのである。王墓は古代の事物を永遠に保存し、時の流れを閉じ込めた「タイム＝カプセル」と理解された。ウェスティングハウス社は、こうした歴史的事件にヒントを得て、「過去」を掘り出すのではなく、「現在」を5000年後の「未来」に受け渡し、掘り起こさせようというアイデアを思いついたという。

興味深いのは、ウェスティングハウス社の「タイムカプセル」が、開発の当初から、「企業広告」としての



William E.Jarvis (2003) 『TIME CAPSULES A Cultural History』 mcfarland&company より



William E.Jarvis (2003) 『TIME CAPSULES A Cultural History』 mcfarland&company より

役割を担っていたことである。広報担当であった作家ジョージ・エドワード・ペンドレーは、世界中から大勢の人が来場するニューヨーク万国博覧会をウェスティングハウス社の名を世界に知らしめる絶好の機会だと考えていた。

万博会場に建設されるパビリオンには、必ず定礎式が行われ工事の安全が祈願される。その時に「定礎箱」と呼ばれる金属容器の中に記念品を入れて礎石の下に埋める記念行事を行うのが通例となっていた。ペンドレーは普通の定礎式では話題にのぼらないと考え、自社で開発した特殊金属を用いて「時限爆弾（time bomb）」に見立てた特別な定礎箱を製作することを提案したのである。しかし当時は、欧州において戦争の暗い影がたちこめ始めたころでもあり、戦争を連想させる「爆弾」は不適切だと社内から反対され、小さな容器を意味するカプセル（capsule）の案が最終的には採用されることとなった。²

2. 「明日の世界」を見せたニューヨーク博覧会

ニューヨーク博覧会のテーマは「明日の世界の建設と平和」であった。オープニングスピーチにはアインシュタインなどの著名な科学者やインダストリアル・デザイナーが招待され、まさしく科学技術時代の到来を予見する大規模な博覧会として幕を開けた。さながら未来都市のように建ち並んだパビリオン建築群は、アメリカ産業と科学技術とデザインの勝利を誇らしげに讃えるモニュメントであり、「明日の世界」を実体験させるものであった。³

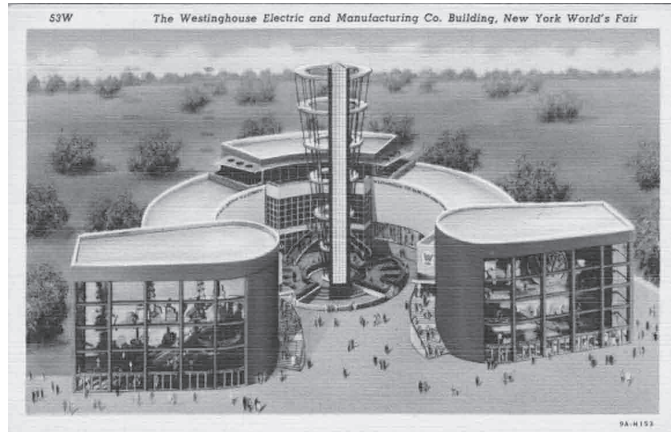
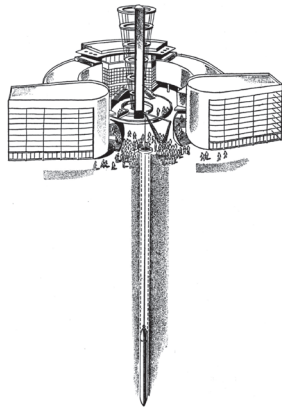
ウェスティングハウス製タイムカプセルの実際の映像は、同社のドキュメンタリー風プロモーション映画『The Middleton Family At the New York World's Fair』（1939）で観ることができる。典型的アメリカ中産階級のミドルトン一家は、ウェスティングハウス・パビリオンを見学する目的で博覧会場に訪れる。彼らはテレビのディスプレイ、ジュニアサイエンス・ホール、電気生活のホールなどを見て回り、電気と電化がきりひらく未来生活を体験し感動する。映画では、潜望鏡のような装置で地下のタイムカプセルを覗くミドルトン一家の満足げな様子が描かれている。彼らは1939年の現在から5000年後の未来を想像力によって覗いたのである。



『The Middleton Family At the New York World's Fair』（1939）でタイムカプセルを覗くシーンと映画のポスターと広告。

⁽²⁾ ウェスティングハウス社のタイムカプセルの正式名称は、「タイム・カプセル・オブ・キュパロイ（the time capsule of cupaloy）」。「キュパロイ」とは特殊金属容器に使われた原料の名前である。

⁽³⁾ 海野弘『万国博覧会の二十世紀』平凡社新書、2013.7



ウェスティングハウス社のパビリオンに展示された「the time capsule of cupaloy」1939

(左：William E.Jarvis (2003)『TIME CAPSULES A Cultural History』mcfarland&company より転載 右：ウェスティングハウス館の絵葉書)

パビリオンの「不滅の井戸（タイムカプセル）」から「未来を覗く」体験を描いた作品は、小説にもしばしば描かれている。たとえば、E.L・ドクトロワの自伝的回顧小説『World's Fair（邦題：『紐育万国博覧会』）』（1985）には、ウェスティングハウス社のタイムカプセルを体験する様子が詳細に語られおり、まるで現地に行ったかのような気持ちにさせてくれる。

「〈ウェスティングハウス館〉の花形スター「エレクトロ・ザ・ロボット」がいるサイエンス・ホールに入る前に、僕たちはタイムカプセルで（というより、それが埋められている場所で）足を止めた。僕は埋められる前のタイムカプセルを見たことがあった。ある土曜日の午後、サリー・シアターのムーヴメント・ニュース映画に登場したのだ。クレーンに吊りあげられたピカピカに輝く鋼鉄の筒は人間の二倍ほどの大きさがあり、両端が弾頭のように丸くなっていた。ウェスティングハウス社の社長が目の前にずらりと置かれたラジオ局のマイクに向かってしゃべったあと、少し大きめに掘られてあった穴の中にタイムカプセルが下ろされた。穴の中にはあらかじめ、タイムカプセルの腐食を防ぐケースが埋めこまれてあった。〈不滅の井戸〉と呼ばれるその穴の中へタイムカプセルが下りていくと、見守っていた人たちから拍手が沸き起こり、作業員が蓋のボルトを締め、まわりにコンクリートの見物台のようなものを作った。僕たちは今、その台の上に立って蓋を見おろし、説明書きを読んでいたのだ。」⁴ (E.L・ドクトロワ 1985)

ニューヨーク博覧会場に埋設されたウェスティングハウス社のタイムカプセルは、「未来」において（「過去」となった）「現在」を発見させる「メディア」となったのだが、収納された未来への「贈り物」は、ゼンマイ式の目覚まし時計、缶切り、歯ブラシ、ミッキーマウスのプラスチックカップ、アスベスト、科学者からのメッセージ、アメリカの銀貨、工場や組み立てラインの写真、ファッションショーのニュースフィルムなどであり、高価で貴重なものはほとんどなく、ありふれたものばかりであった。砲弾型のタイムカプセルの容量には限界があり、比較的小さなものや写真やフィルムなどが選ばれたのであろう。⁵

しかしタイムカプセルは博物館の陳列ケースではない。収納物の審美的な価値や財産的な価値には重きが置くのではなく、「現在」を容器の中に閉じ込めて内容を不可視化し、5000年後の未来へのロマン主義的な想像力をはたかせる行為を誘発させること、それ自体が重要なのである。

タイムカプセルの収納物は、収納された時点で「過去の埋蔵物」であり、そして地中深く埋設されることで「未来への贈り物」となる。不可視化されたそれは「想起」の対象であるがゆえ、つねに解釈の余地を拡げていく。つまり、地中深く埋設して見ることの出来ない記念物と化すことによって、タイムカプセルは、解釈学的な「物語」を胎

⁽⁴⁾ E.L・ドクトロワ『紐育万国博覧会（原題『World's Fair』）』1985

⁽⁵⁾ ほかに、カプセルがいかにして成り立ったかその発見方法・英語発音に関する注意・将来人に渡さるべきメッセージを含む『The Book of record of the Time Capsule of capaloy』という書籍も埋設されている。

動させる恒久的メディアなのである。

こうしてみると、タイムカプセルは、記録や記憶を目的としながら、「一時的な忘却の装置」でもある。だから開封する行為によって現在を過去へと一足飛びに導くタイムカプセルが、物語の分野ではタイムトラベルと(意図的に)混同されてきたことはけっして偶然ではない。たとえば、浦島太郎が玉手箱を開ける瞬間に生起する出来事とは、因果を反転させたタイムトラベル的な経験の一例なのであろう。またタイムカプセルに与えられる休眠の長さは、人類がすでに存在しないことを暗喩する。そのため、ポール・アンダースン『タイムカプセルの秘密』(1952)や星新一「ある戦い」(1964)、星新一「古代の神々」(1969年)のように、人類が死滅した後や第三次世界大戦後の世界を描いたタイムカプセル作品が多いのである。

3. 風変わりな企業パビリオンであった「松下館」

「伝統と開発——この二つのことが織りなす、静かなものと激しいもの、古いものと新しいものの調和する姿を、湖面に浮かぶ天平ふうの建物二棟と、みやびやかなお手前(お茶)の行事、そして現代の文化を5,000年後の人々に残そうとする科学の結晶「タイムカプセル EXPO'70」の制作技術に求めたのが、松下館の出展内容です。」⁶ (松下館ニュースNo.5)

1970年日本万国博覧会において、未来都市のような他の企業パビリオンと比べて松下館は明らかに異質な存在感を放っていた。「人類の進歩と調和」をテーマに開かれた日本万国博覧会は、映像博といわれたモントリオール博覧会の後を受けた前衛的な建築と映像技術の実験場であり、21世紀の都市を彷彿させSF的イメージに溢れていた。しかし建築家吉田五十八の設計による松下館は、天平の面影を伝える端麗な堂宇を中心に、前庭には池を、周囲には竹林を造成した和風建築であり、SF的イメージでも、ロシアアヴァンギャルド的造形でもなく、落ち着いた伝統的な佇まいをみせていた。



万国博松下館の夜景

左：松下館の外観 パビリオンを紹介する小冊子の表紙。右：松下館ニュースの宣伝資料

松下幸之助は、吉田五十八に設計を依頼した時のいきさつを次のように述べている。

「社内はもとより多くの人の意見を聞いてみたが、決め手となるものは出てこなかった。そんなある日、たまたま私を訪ねて来た人が見せてくれたパンフレットの一枚の写真が私の目に留まった。それは、いまはもうお亡くなりになったが、建築家の吉田五十八さんが設計された奈良・中宮寺の御堂の写真だった。一瞬、私は「これがいいなあ」と思った。「よし、これを見本に松下館の設計をしてもらおう」と決心して、さっそく設計者の吉田五十八さんをお招きし、お願いしたのである。」⁷

⁶「松下館ニュースNo.5」1970.3、松下電器産業株式会社

⁷松下幸之助『夢を育てる 私の履歴書』日本経済新聞社、1989.5、136ページ

万博開幕当時の松下館を『サンデー毎日』は、「光と音の万国博として夜空に浮かぶシンボルゾーンが、続いて各国パビリオンのコンパニオン、電気通信館のワイヤレスフォンが「情報革命の万博」を強調し、そして一枚の広告を挟んで「松下館」が登場する。」そして、「現代を 5000 年後に残すタイム・カプセル 純和風・松下館の呼びもの」「前衛と未来、原色がはらんするなかで 1200 年前の天平時代を模した静かなたたずまいは印象的だ」⁸と報告している。

国内の著名な建築家を総動員した日本万国博覧会の企業パビリオンは、さながら建築博覧会のごとき様相を呈していた。真鍋博が描いたイラストのような近未来的な建築様式を競い合うなかで、奈良の中尊寺御堂を巨大にしたような日本人にとって馴染みのある和風建築はひときわ落ち着いた雰囲気を漂わせていたのである。

事実、松下館の来場者における評価は非常に高かった。『観客がとらえた日本万国博覧会—実態調査報告書—』における万博開催後の来場者のアンケートでは、「建築で最も印象に残った展示館」という項目において、松下館は国内館で最も高い評価を得ている。国内館 52 館のうち 1 位が松下館、2 位が古河パビリオン、3 位が日本館、4 位に三菱未来館と続く。来場者にとっては、日本伝統文化を何らかの形で表現した建築の方が近未来型の展示館よりも印象に残った。⁹

日本の伝統様式にこだわった松下館が好印象であった一方で、構造物とも建築ともつかないパビリオンの景観に対しては、異を唱える意見もいくつか見受けられた。たとえば朝日新聞には、「安っぽい“未来館”を自賛する館や、仕掛けばかりが仰々しい“宇宙旅行”が売りものの館は、いみじくも無国籍者の白痴性を露呈している」と手厳しい批判が載っている。

「各国の展示館とは対照的に、企業館はきわめて無国籍的である。映像はどれをみても子どもと黒人と海と砂ばく。しかもこれらに生活のにおいはない。密林の香りがただようアフリカ諸国の展示館とは大きな違いである。企業館の、この無国籍性は、国際性と同じではない。国際性には、国家や民族を止揚した普遍性がともなうが、無国籍性にはそのような積極的な意味はなく、単なる逃避があるだけである。技術的・芸術的エネルギーが感じられる企業館はまだよい（たとえば鉄鋼館、みどり館、せんい館、リコー館、タカラ・ビューティオリオンなど）。しかし安っぽい“未来館”を自賛する館や、仕掛けばかりが仰々しい“宇宙旅行”が売りものの館は、いみじくも無国籍者の白痴性を露呈している。」¹⁰

「建築と庭というのは絵と額縁の関係」にあると常々言っていた吉田五十八は、池とパビリオン建築が竹林のなかに一体として在るように見せるため約一万本の竹を敷地内に植えた。¹¹ おもちゃ箱をひっくり返したような建築がひしめき合う会場のなかで、竹林と池を借景にした松下館が特別な展示館として人々の脳裏に焼き付いたことは容易に想像できる。松下館は、「伝統」を受け継ぎながら新たな繁栄と進歩のために開発を行う松下電器の研究理念をパビリオンと展示物に具体化させた希有な成功例であったといえるだろう。

4. 松下館に展示された「タイムカプセル EXPO'70」

徹底した日本趣味の意匠に加えて、松下館は展示物に関しても異色であった。松下館のメイン展示物は「タイムカプセル EXPO'70」であり、ほとんどそれだけで展示物の見学は終始した。他の企業パビリオンのように、来場者に対して映像体験をさせたり、企業イメージに繋がる具体的な製品や技術を展示したりするわけでもなく、壺状のタイムカプセルとその収納物を並べるだけの、いたってシンプルな展示構成であった。

⁽⁸⁾『サンデー毎日 3/22 日特大号』毎日新聞社 1970.3.22

⁽⁹⁾『観客がとらえた日本万国博覧会—実態調査報告書—』万国博総合調査機構、1971.3、57 ページ

⁽¹⁰⁾朝日新聞 昭和 45 年（1970 年）4 月 16 日木曜日

⁽¹¹⁾砂川幸雄『建築家吉田五十八』晶文社、1991.12、230 ページ



『TIME CAPSULE EXPO'70 記録書 1970年からの5000年後へのメッセージ』より

池にかかった長い正面の橋から建物に入ると、ぼんやりとした照明のなかに「タイム・カプセル EXPO'70」の実物が展示されている。鈍い金属色の球体の台座には「五千年後にひらく球（たま）」の文字がみえ、周囲の壁面には金箔が貼られ、グラスファイバーの原理を応用した「光の花」が幻想的にゆれている。3階からスロープを2階へ下りると壁面には5000年の時の流れに挑戦するカプセルの保存と収納の技術を説明するコーナーがあらわれる。そこにはタイムカプセル本体に使われたNTK22AT 鋼の耐久テストや、輪切りにしたカプセル、滅菌、消毒をくり返す収納品の扱いなどが紹介されている。

次のコーナーでは、カプセル収納物の実物のまま展開されている。自然科学部門で選ばれた金属、機器類として選ばれた、腕時計、小型カメラ、人工心弁、人工血管、植物の種子、避妊具、紙おむつ、芸術分野として選ばれた日本の現代小説、わらべ歌のテープ録音、松下館のBGMに使用されたレコード盤、など実に様々だ。現代日本人の一日と一生、春夏秋冬を描いた大絵巻風の展示もある。誕生を代表するベビー服と出産届、生命の最期の場面には死亡届と香典袋が並ぶ。ウェスティングハウス社のタイムカプセルと同様に、ここでも見慣れた身のまわりのものがそのまま5000年後に受け渡されるのである。



「松下館」のパンフレットより転載

タイムカプセル容器は、松下電器生産技術研究所が設計、久保田鉄工の協力を得て製作された。その形状は、高さ1.3メートル、内容積50万立方センチメートル、重量1.6トンのホワイトグレーの球形である。

海外のタイムカプセルが機能的な砲弾型や扁平型であるのに対して、「壺」を連想させる形状にした理由は日本の伝統文化の意匠を意識したからだが、機能面においても球形であることは利点がある。同容積の場合は表面積が最小で、内外圧が均一にかかるため、構造力学的にもっとも安定した形状であるからだ。

また、内部の気密性を高めるために二重蓋が採用されている。カプセル容器の材質は、NTK22AT ステンレス

鋼铸件である。この金属の利点は、腐食に耐え、温度変化に対しても安定性が強く、磁性をもたず、切削、溶接などにも適していた。

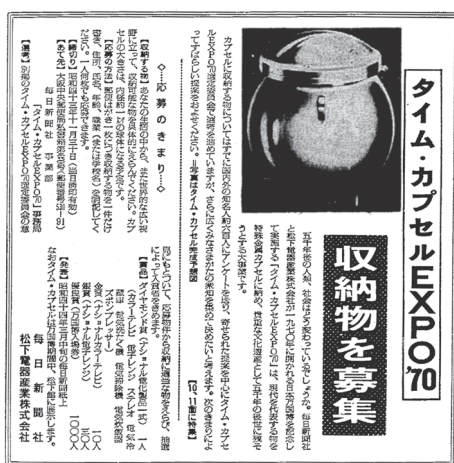
5. タイムカプセル収納品の選定基準

技術力を結晶させた容器以上に、観客にとっては、カプセルの中に入れる収納品は興味の対象である。その選定基準は「日本中心」「現代中心」とされ、後世の人類が直接、手にとってみることであり、と、「現物主義」が採用された。選定にあたっては、国内はもとより、世界 36 カ国、632 人の有識者に呼びかけ、12 万通余りの国内公募など日本全国の総意が集められた。その結果、収納物は、自然科学分野、社会分野、芸術分野の三分野にわたって選り抜かれ、合計 290 件、2,068 点に達している。

昭和 43 年（1968 年）4 月 18 日付毎日新聞には、次のような選定委員会委員決定の社告が載っている。

「一九七〇年に開催される万国博を記念して、毎日新聞社と松下電器株式会社が企画した「タイム・カプセル EXPO'70」の事業は、さきにカプセル本体の開発を指導する技術委員会が発足、力強い第一歩を踏出しましたが、これに引続きカプセル内に収納する物品や記録を選ぶ選定委員会委員に次の二十七氏を委嘱しました。五千年後の、遠い未来の人類に残す現代文化の「遺産」として何を選ぶかは。内外著名人からアンケート、国内一般公募を行い、それらを資料として同委員会で討議し決定します。赤堀委員長以下二十七委員は、自然・社会科学、芸術のあらゆる分野にわたって、それぞれ第一線で活躍されている方々であり、幅広い視野と学識から討議していただけるものと大いに期待されます。」¹²

6. イベントとしての一般公募で話題づくり



1968 年 11 月 1 日毎日新聞朝刊

収納物の選定を選考委員会だけでなく、広く一般に募集したことは、大きな反響をもたらす結果を生んだ。“あなたはどんなものをタイムカプセルに残すべきだと思いますか？” “5000 年後の人類へ簡単なメッセージをお寄せください” という問いかけが新聞紙面を通じて大々的に行われ、万博の開催を前に人びとの関心は否応なく高まっていった。「5000 年後の人類への贈り物」というアイデアは、「人類の進歩と調和」という万国博覧会のテーマとしては、分かりやすく魅力的だった。収納物を公募することによってタイムカプセルのプロジェクトは、万博開催に先行してスタートを切った。公募によって人々を能動的に参与させることがむしろタイムカプセル・プロジェクトの重要な狙いであったのかもしれない。

1968 年 11 月 1 日の毎日新聞朝刊には、収納する物を「あなたの生活の中から、また世界的な広い視野に立って、収納可能な物を具体的に選んでください。カプセルの大きさは、内径約一メートルの球体になる予定です」とあり、選考は「タイム・カプセル EXPO'70 選考委員会の意見にもとづいて、応募物件から収納に適当な物をえらび、抽選によって入賞者をきめます」とある。¹³

公募収納品入賞者の発表は 1969 年 3 月 13 日毎日新聞紙面において行われた。タイムカプセル収納品の一般公募が 11 月 30 日に締め切ったが、集まったアイデアは総数 116,200 余件にものぼり、隣国韓国からの応募もあった

⁽¹²⁾ 毎日新聞、昭和 43 年（1968 年）4 月 18 日付

⁽¹³⁾ 賞品は、「ダイヤモンド賞」としてナショナル電化製品一式（カラーテレビ、電子レンジ、ステレオ、電気冷蔵庫、電気洗濯機、電気掃除機、電気炊飯器、ズボンプレス）が 1 人という豪勢なもので、「金賞」としてナショナル・カラーテレビが 10 人、「銀賞」としてナショナル電子レンジが 30 人、優秀賞として万国博入場券が 1000 人となっている。

という。このうち 7,600 件がこれまで選定委員会で取り上げたことのない新提案であり、選定委員会は、義眼、塩、ソロバン、宝くじ、手錠、大学入試問題集など数十点を収納品に加えることを決定した。¹⁴

7. 創業五十周年記念事業として

タイムカプセルがどのような過程を経て決定したのか、いささか駆け足ではあるが、松下電器の社史から追ってみたい。

「昭和四十一年九月、わが社は万国博対策委員会を発足させ、ここに全社あげての協力体制を整えた。そして、いち早く出展計画を検討の末、昭和四十三年十月、具体的成案を得て日本万国博覧会協会へ提出し、出展契約を結んだ。その計画は建物に天平時代の建築様式をとり入れ、前棟にはタイムカプセルを展示し、後棟にはお茶室を設けて訪れる人びとに閑静なひとときを味わってもらおうという松下幸之助会長の構想に基づいたものであった。」¹⁵

展示の趣旨は、日本古来の伝統の美しさと技術力のたくましさとの調和の姿を形で表そうというものであり、〈伝統と開発〉というテーマを具体的するため、「〈伝統〉の姿を吉田五十八による「松下館」の天平の面影を伝える端麗な堂宇、竹、水の中に求め、〈開発〉の姿を、現代文化を 5,000 年後の未来に伝えるタイムカプセルによる科学への挑戦という形で表現したのである。¹⁶

ここで注意すべき点は、「タイムカプセル EXPO'70」のプロジェクトが、「松下幸之助会長の構想に基づいた」ものであり、松下電器創業五十周年事業として位置づけられていたことである。周年事業が創業者松下幸之助と企業の成長を歴史化する重要な機会であることは言うまでもない。その内容は企業の存在理由を代弁するものもあり、また企業理念と一体でなければならない。創業時の本店をそのまま再現した「松下電器歴史館（現松下幸之助歴史館）」昭和 43 年 3 月の開館も五十周年事業のひとつである。内部には創業当初からの歩みを伝える資料や記念品が展示され、創業者松下幸之助の人となりを紹介されている。

興味深いことに、松下館の展示物として初期段階で計画されていたのは、「エレクトロニクスとマンモスカラーテレビ」であった。電器メーカーらしく技術力を誇示する企業 PR のための展示内容であったが、「日本万国博はあまりにもコマーシャルベースの傾向が強く、出展の在り方に問題がある」（昭和 42 年 7 月 20 日）としたいわゆる松下談話を受けて、その案は変更されることになる。テーマとして掲げた「伝統と開発」を象徴するためには、マンモスカラーテレビを展示するより毎日新聞より提案のあったタイムカプセルがふさわしいと判断され、「万国博は企業戦宣伝の場ではなく、製品の見本市ではない」という BIE の議論に結果的に歩調を合わせたのである。

『日本万国博事典』¹⁷にもう少し詳しい背景が載っている。海外市場の開拓に努めていた松下電器産業は日本万国博については早い時期から強い関心を示していたのだが、昭和 40 年 12 月には日本万国博協会会長に松下幸之助が就任すると同社の万博出展は決定的となる。松下電器産業の社内に万国博対策事務局が設置されたのは翌年の 9 月のことである。そこで情報収集、基本方針の策定などがなされ、昭和 41 年 12 月には約 15 件の出展基本計画が提出された。正式に「万博対策委員会」が発足するのは昭和 42 年 3 月である。同委員会は松下電器を中心に傘下の松下グループ各社の代表によって組織され、展示企画は松下グループの総力を挙げて立案、策定されることとなり、その結果マンモスカラーテレビ「ナショナル・ジャンボカラーテレビ」をあしらった展示館の模型をはじめ、約 60 件の応募が寄せられた。昭和 42 年 4 月 1 日の出展申し込み時の松下館の構想では、¹⁸館名が「松下館」、

⁽¹⁴⁾ 1968 年 11 月 1 日毎日新聞朝刊

⁽¹⁵⁾ 『社史 松下電器 激動の十年 昭和 43 年～昭和 52 年』松下電器産業社史室、1978.5、210 - 211 ページ

⁽¹⁶⁾ 同、210 - 211 ページ

⁽¹⁷⁾ 丸ノ内リサーチセンター『日本万国博辞典 改訂再版』丸ノ内リサーチセンター、1969.10

⁽¹⁸⁾ この時点でグループ参加の体制が未だ整わなかったために、松下電器産業（株）の名で行なったが、同社の単独参加でないことはすでに前提となっていた。

展示構想は「エレクトロニクスとマンモスカラーテレビ（同グループの技術紹介を主内容とする）」、費用は約20億円とある。

このように松下電器産業は展示構想の具体化を進めていたのだが、昭和42年7月の「万国博における商業主義否定」する、いわゆる松下談話の後、それを受けて展示内容の見直しの報告へと舵を切った。また松下幸之助は「万国博は宣伝の場ではなく、企業あるいは企業グループとしてではなく業界単位として出展すべきであり、松下グループの出展準備については再検討したい」と語り、万国博の性格にも一石を投じた。

松下会長の談話もBIE理事会における批判意見も、いずれも万国博から商業主義を排そうとするものであったが、他方では商業主義を取り入れるべきだとする提言も改めて行われた。その代表的なものが、松下談話と時期を同じにする7月20日の日本貿易振興会の駒村資正理事長（協会理事）の発言である。駒村は「モンテリオール万国博のように、コマーシャリズムを厳しく排除したら、出展参加する企業はなくなるだろう。多少の条件をつけてもコマーシャリズムは認めるべきだ」と主張し、「早急に日本万国博の性格を規定する必要がある」との意見を述べた。

8. タイムカプセルのハイライトは埋葬式

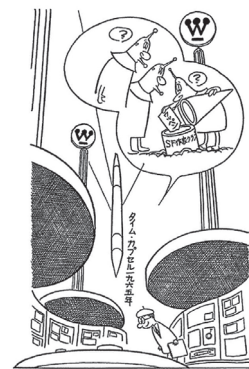
タイムカプセルの展示だけの松下館であったが¹⁹、万博開催以前に一般の人が参画できる公募を用意したことによって、その成功は約束されていたといえよう。また、タイムカプセルの展示は、他のパビリオンの展示のように、その場でしか体験できないという一過性のものとは本質的に異なるものであったことも強調しておくべきだろう。松下館の展示のハイライトは、万博終了後のタイムカプセルの埋設にあった。そのイベントも含めての展示なのである。したがってここでは埋設する前の状態が一時的に展示されていることになり、いわばこれから始まるタイムカプセル・プロジェクトを見ることができ最後の機会だったのである。

アトラクションとしてパッケージ化された他のパビリオンとは異なり、事前公募や展示物においても、参与の余地が大きいことが松下館の特徴である。来場者の期待は、感覚的な刺激を求めているのではなく、テーマである「伝統と調和」を共有しながら5000年後の未来を想像すること、いわば5000年後への想像上でのタイムトラベルを経験するのである。

9. SF作家とタイムカプセルの関係

タイムカプセルの発想が、日本の「SF作家クラブ²⁰」によって先行していたことはあまり知られてはいない。実は、星新一や手塚治虫らがモンテリオール万国博でタイムカプセルを実見し、タイムカプセルの製作を企画していたのである。『週刊サンケイ』1964年5月18号には、ニューヨーク博覧会を見学した手塚治虫のエッセイが載っている。

「SF作家クラブからはくはひとつの命令をうけていた。それは、世界博で、タイム・カプセル第二号を埋めるそうだから、日本で埋めるとき参考によく実体を見てきてほしいというのだ。タイム・カプセルは、五千年後の未来の世界へ、現在の文明を伝えるための資料を詰めて埋めて保存する、いわば



手塚治虫が描いた1965年ニューヨーク博覧会のタイムカプセル

⁽¹⁹⁾ 展示内容の実直で外連味のなさは、「展示方法で最もすぐれている展示館は？」というアンケート項目に如実に反映している。建築物としては最も印象に残った松下館であったが、展示方法に対して観客は同様の高評価を与えてはいない。国内館で展示方法が最もすぐれていたと思う展示館の1位は三菱未来館、2位が日本館、3位がみどり館であり、松下館は4位である。万国博覧会は「未来都市」「映像万博」と宣伝されていたから、一般の観客が映像技術の展示効果を高く評価したのであろう。（『観客がとらえた日本万国博覧会—実態調査報告書—』万国博総合調査機構、1971年3月）

⁽²⁰⁾ 日本SF作家クラブ（SFJ: Science Fiction and Fantasy Writers of Japan）は、1963年発足の日本のSF作家・翻訳者や評論家、編集者による親睦団体。小松左京、星新一、筒井康隆ら日本SF界の重鎮はほとんど所属していた。

未来への小包便だ。第一号は一九四〇年にやはりニューヨークで埋められている。」²¹

また手塚は「未来への小包」というエッセイで、次のように書いている。

「すでに週刊誌などでゴシップ的に取り上げられてが、SF作家クラブでは、「タイム・カプセル計画」というのを、一年来推し進めている。これはいうなれば未来への書留小包であり、いま日常使っているものを一個の容器に押しこんで密封し、地下へ埋めて未来まで保存しようという計画だ。まるで夢物語のようにのんびりした話だが、火星の土地を買おうなどという御仁の現れるけっこうな時世なら、このくらいのお遊びは許されてよいだろう。(中略)未来への小包といっても、どの程度の未来かという問題だが、最初の三百年後のつもりが、五千年になり、ついに十万年先に落ち着いた。考えてみれば、三、四百年先にはまだ現代文明の名残が残っているだろうし、五千年ともなれば、なんらかの方法で過去を見透せるような器械が発明されているだろうといったものである(SF的空想で申し訳ない)。結局、これは人類ではなく、それが滅び去ったあとにくる高等生物か、あるいは宇宙人に提供するものが適当と相成った。いずれにせよ、会員が選んだ品目が、現代文明の寵児ではなく、多分に懐古趣味的な、早晩なくなるだろうと思われる日用品が多かったのはおもしろい。」²²

ニューヨーク博覧会での経験から星新一は、タイムカプセルを題材にしたショートショートをいくつも書いている。いずれもユートピア的未来社会ではなく、文明が崩壊した後のデストピア的な世界がタイムカプセルとともに描かれている。²³ 5000年という時間の流れから想像される運命は、手塚がいうように、また星がショートショートで描いた世界のように、人類が滅び去った後の話なのかもしれない。

松下館におけるタイムカプセルの立案は、毎日新聞社と松下電器産業の共同であったが、読売新聞社とタイムカプセルとの関係は深い。1964年5月23日付け読売新聞によれば、SF作家クラブとは別に、ウェスティングハウス社のタイムカプセルに収納する品物を選定する委員として、正力松太郎読売新聞社社長、湯川秀樹博士、糸川英夫東大教授の三人が参加することに決まったと報じている。また1965年2月14日読売新聞では、ウェスティングハウス社社のジョゼ・デ・キューバス社長が13日、日本テレビ迎賓館を訪れ、正力社主よりタイムカプセルに納める資料として1964年11月2日付けの読売新聞朝夕刊、同日付けの読売新聞創刊九十周年記念特集号が贈られたとある。紙面には、「これらの紙面を手にしたキューバス氏は「アメリカに帰ってカプセルに入れますが、五千年後の新しい文明の時代に、この新聞は、また多くの人たちに読まれるでしょう」と正力社主と堅い握手をかわした。」とある。²⁴



読売新聞 1965年2月14日付け朝刊

こうした経緯を顧みると、毎日新聞と松下電器産業の共同立案ではあった「タイムカプセル EXPO'70」であるが、タイムカプセルのオリジナル案であるウェスティングハウス社と読売新聞との関係が先行しており、毎日新聞社が松下電器産業に働きかけたのは、読売新聞にならびに日本SF作家クラブの発案も何らかの影響を与えていたのではないだろうか。

⁽²¹⁾ 手塚治虫「ニューヨーク博覧会ある記」(電子書籍版『手塚治虫エッセイ集4』2015年10月31日所収、出典「週刊サンケイ」1964年5月18号)

⁽²²⁾ 『岩波講座 現代2 科学技術と現代』月報6 岩波書店 所収 1963年11月5日発行)

⁽²³⁾ 星新一のタイムカプセル関連作品には次のものがある。星新一「古代の神々」(初出「サンデー毎日」毎日新聞社、1969年3月30日号、35-39ページ)、星新一「ある戦い」、星新一『妖精配給会社』新潮社、昭和51年(初出:昭和39年(1964)早川書房)、星新一「おみやげ持って」 星新一『妖精配給会社』新潮社、昭和51年(初出:昭和39年(1964)早川書房)

⁽²⁴⁾ 「読売新聞を贈る 五千年後に残すタイムカプセル 世界六大紙に選ばれ埋蔵」1965年2月14日読売新聞朝刊

むすびにかえて

重松清の小説『トワイライト』（重松清『トワイライト』文藝春秋、2005年12月）は、2001年の夏、東京郊外にある小学校の中庭で掘り出した「タイムカプセル」を開封するところからはじまる。26年ぶりに同級生たちが集まって校舎の裏庭の土の中からコンクリートブロックで作った石室の蓋を開ける。収納されていた品々は、筆箱、消しゴム、ゴム製のスーパーボール、ジャイアントのピンバッチ、シャープペンの替え芯ケースなど、当時の小学生が使っていたごく普通の日用品ばかりだ。しかし「タイムカプセル」のなかに納められたそれらの物質がその頃の日常と隣接していたために、記憶の呼び水となって感傷的な物語が招聘される。

このような小規模な「タイムカプセル」は、日本では多数存在する。タイムカプセルのアイデアは、学校の卒業記念や災害の記念などにしばしば採用され、校庭の片隅や記念の石碑の下などに埋められてきた。市販のタイムカプセル容器もいろいろあるから、私的に製作された手製のタイムカプセルを加えれば、ほとんど無数にあると言ってよいだろう。ちなみに1991年1月から2001年1月までのタイムカプセルに関連した記事を拾ってみると、埋設と開封が日本中のどこかで隙間なく繰り返されていることが分かる。日本はタイムカプセル王国なのであろう。

ウェスティングハウス社のタイムカプセルにしても、松下電器のタイムカプセルにしても、それらは5000年間地中深く埋設されたまま不可視となる。開封までの時の流れは、人間の生の有限性からすればおそろしく長い。しかし最初のタイムカプセルが「時間爆弾」とされたように、開封した途端に過去が現在において突如立ち現れることは、たとえ小規模であっても驚きである。変化を確認するのではなく、変化がないことを確認し、時を遡ることがタイムカプセルの開封儀式なのだ。

埋設されたタイムカプセルは、存在自体を不可視化することにより「想像の未来」を引き寄せる。5000年後の人々は収納された品々を見て、どんなことを思うだろうかと地上のモニュメントを見るたびに何度も繰り返し想像させる。その結果、タイムカプセルは恒久的な「メディア」として生き続けることになるだろう。それは廃墟などにあらわれる郷愁やロマン主義ではなく、朽ちること、滅ぶことのない過去に、未来において立ち会うことを意味するものである。

【参考文献】

- ・海野弘（2013.7）『万国博覧会の二十世紀』平凡社新書
- ・E.L・ドクトロフ、中野恵津子訳（1994.9）『紐育万国博覧会』文藝春秋
- ・William E.Jarvis（2003）『TIME CAPSULES A Cultural History』mcfarland&company
- ・坂口栄伸（2015.12）『モニュメントの20世紀 タイムカプセルが伝える〈記録〉と〈記憶〉』吉川弘文館
- ・重松清（2005.12）『トワイライト』文春文庫
- ・砂川幸雄（1991.12）『建築家吉田五十八』晶文社
- ・タイム・カプセル EXPO'70 記録小委員会（1975.3）『TIME CAPSULE EXPO'70 記録書 1970年からの5000年後へのメッセージ』毎日新聞社／松下電器産業株式会社
- ・平野晁臣編著（2014.3）『大阪万博 20世紀が夢見た21世紀』小学館
- ・星新一（1976.11）『妖精配給会社』新潮文庫
- ・松下幸之助（1989.5）『夢を育てる 私の履歴書』日本経済新聞社
- ・松下電器産業社史室（1978.5）『社史松下電器激動の十年 昭和四十三年～昭和五十二年』松下電器産業
- ・丸ノ内リサーチセンター（1969.10）『日本万国博辞典 改訂再版』丸ノ内リサーチセンター
- ・万国博総合調査機構（1971.3）『観客がとらえた日本万国博覧会 実態調査報告書』万国博総合調査機構

※本研究は公益財団法人吉田秀雄記念事業財団平成28年度第50次の助成を受けたものである。本稿は『大阪万博の企業パビリオンにおけるテクノロジー表象に関する学際的研究』を元に加筆と訂正を行った。